

小林颯 個展「ポリパロール」

2024.6.26 (水) – 7.21 (日)



ご挨拶

株式会社リクルートホールディングスが運営するBUGでは、2024年6月26日(水)より、小林颯による個展「ポリパロール」を開催します。小林は、東京藝術大学大学院を修了後、2020年に公益財団法人江副記念リクルート財団の奨学金を受給してベルリン留学を実現しました。その間に国内で複数の賞を受賞するなど、これからが期待されるアーティストです。BUGでは小林の今後のキャリアを後押しすべく、新作を含め本人にとっては最も大規模となる個展を開催します。

本展のタイトル「ポリパロール」は、「複数の」を意味する「ポリ (poly-)」と、言語学上で「個人が特定の場で行う発話行為」を表す「パロール (parole)」を合わせた、小林による造語です。

留学と同時期に起こった新型コロナウイルス感染症のパンデミックは、人種による分断や対立を深めました。小林も一時帰国できず、見知らぬ土地でエクソフォニー* (ドイツ語で「母語の外に出た状態一般」の意) という状態を経験し、〈よそ者〉について考えるようになります。

展示作品の一つ《つぎはぎの言語》は、ベルリンに亡命した中国四川省出身の詩人との対話から制作されました。詩人は、自身の亡命を「我跑了 (私は逃げた / I ran.)」と言い表します。小林は、異なる文脈を持ちながら共鳴する詩人の言葉を用い、〈よそ者〉同士を縫い合わせようと試みます。

本展では、展示作品や会期中に開催するイベントを通して、近年小林が関心を抱く〈エクソフォニー〉〈移民〉〈クィアネス〉といったキーワードを元にした、複数の人々のおしゃべりが聞こえてきます。ベルリンで様々な背景を持つ人々のおしゃべりに触れた小林は、装置、映像、多言語詩、Podcastなどのさまざまなメディアで制作された作品を通して、「個人的なことは政治的なこと」というシンプルで力強いメッセージを伝えます。

最後になりましたが、本展の開催にあたり、温かいご支援、ご協力を賜りました皆様に厚く御礼を申し上げます。

* 多和田葉子『エクソフォニー：母語の外へ出る旅』2012、岩波現代文庫

小林 颯 / hayate kobayashi

1995年北海道生まれ。ドイツ・ベルリン在住。
東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。公益財団法人江副記念リクルート財団 アート部門 リクルートスカラシップにより渡独。2024年にベルリン芸術大学大学院アートアンドメディア科修了。器として映像を捉え、自作の装置から新たな語りの形を探る。近作は、翻訳とアイデンティティの観点から、装置、映像、詩作を通じて、エクソフォニーと語りについて再考している。2020年制作の「灯すための装置」が第24回文化庁メディア芸術祭アート部門新人賞を受賞。Forbes 30 Under 30 Asia 2022 The Arts に選出された。



インタビュー
(22分53秒)



美術手帖
インタビュー

関連イベント

小林颯個展「ポリパロール」の関連イベントとして、以下のイベントを開催。※詳細はBUGウェブサイトをご確認ください。

トークイベント：「海外美術大学留学と制作について」

今回のトークイベントでは、展示作品の一部をベルリンで制作した小林の話も交え、現在も海外留学をしている登壇者それぞれの作品や制作手法についてお話をお伺いします。

海外で学んでいることの実験がどのように制作に影響を与えているのか、留学する中で感じる文化の違いや日本の美術大学との違いなど、留学を検討している人だけではなく、グローバルな美術の世界を知りたい人にもうってつけのイベントです。イベントの最後には、学生の皆さんに向けて当財団の2024年度リクルートスカラシップ アート部門奨学生募集説明を行います。

ゲスト：大竹 紗央(ニューヨーク大学大学院在籍)、上野 里紗(セントラル・セント・マーチンズ 修士課程修了)、
中岡 尚子(ベルリン芸術大学在籍)

2024年7月10日(水) 会場：BUG



関連イベント：瀧見陽 × ミヤギフトシ × 小林颯

<個人的な語りと社会との距離>をテーマに、本展覧会の作品はもちろん、登壇者それぞれの作品やこれまでの活動についてお話をお伺いします。

イベントゲスト：瀧見陽(書店「loneliness books」オーナー/グラフィック・デザイナー)、
ミヤギフトシ(現代美術作家)

2024年7月5日(金) 会場：BUG



ワークショップ：「借りた言葉を演じてみる」筒 | tsu-tsu × 小林颯

実在の人物を取材して、演じる「ドキュメンタリーアクティング」という手法で制作をする筒 | tsu-tsuさんをお招きし、ワークショップを開催します。

イベントゲスト：筒 | tsu-tsu (ドキュメンタリーアクター)

2024年7月19日(金) 会場：BUG



会期：2024年6月26日(水) – 7月21日(日)

主催：BUG

協賛：公益財団法人 クマ財団

キュレーション：小林祐希、檜山真有 (BUG)

制作：飯野優美 (BUG)

広報：桑間千里 (BUG)

告知物デザイン：田岡美紗子

翻訳：鈴木理穂

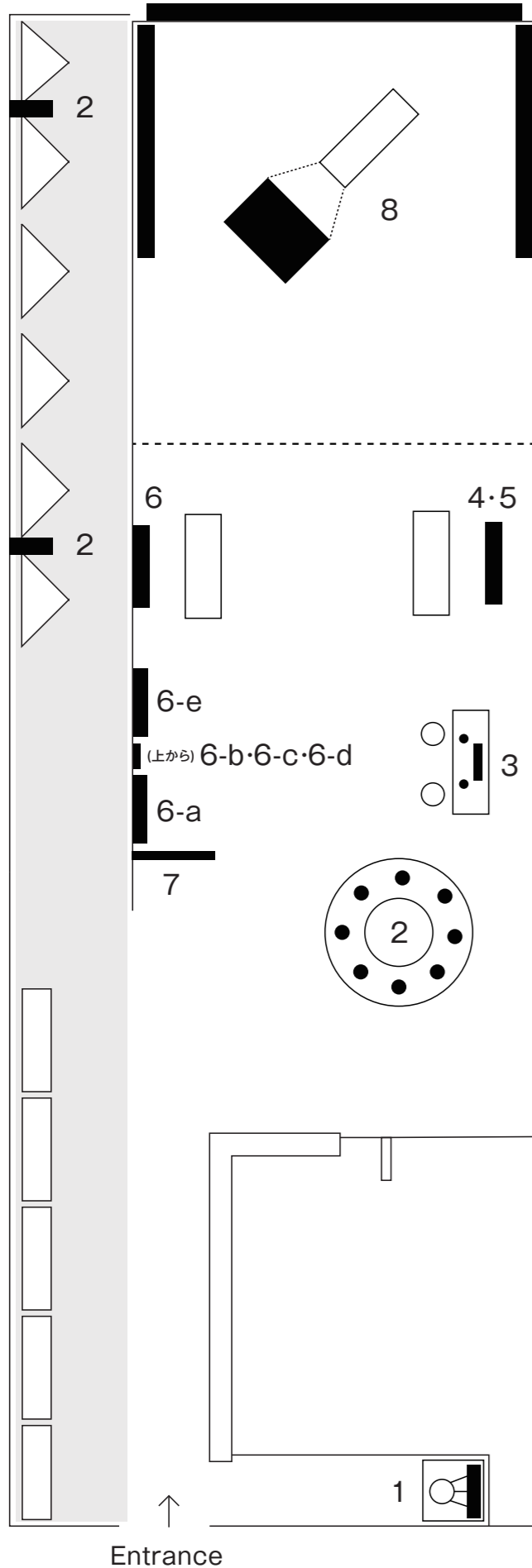
会場撮影：本吉映理

インタビュー・会場映像撮影：西野正将

設営：HIGURE 17-15cas

作品リスト

各作品について、作品名/制作年/素材/サイズを記した。全て作家蔵。



1
Condensed Coffee
2021
シングルチャンネルビデオ / サイズ可変

パンデミック当時、都知事の三密宣言から着想を得た作品。緊急事態宣言下にも関わらず人通りの多い渋谷スクランブル交差点に着目。人通りはドリップに、車通りはコーヒー粉へ変換される。最後には大量のコーヒーが淹れられる装置は、「密」が持つ滑稽さを表している。会場のモニターに映るのは渋谷のライブ映像だ。緊急事態宣言下も、今も、街は変わらず密な様子が伺える。BUG Cafe にて展示。

5 写真・映像撮影 NG
Tracing You
2022
シングルチャンネルビデオ / 5分9秒

YouTubeにアップロードされている家族のホームビデオを観ることが習慣となり、また、クリア映画を自身の中に消化するため、ホームビデオをドローイングにてなぞりなおすアニメーションを制作。異性愛規範のもと、普通の日常に何の違和感も覚えなない何気ない日常を生きる家族とアーティスト自身の生活や環境が対比される。また、映像の後半では、アーティストとその友人との日常の会話映される。会話の中でのすれ違いや思い違いは、個人間のコミュニケーションにとどまらないより広い社会でのすれ違いなども示唆する。

7
134万人の口へ
2022
シングルチャンネルビデオ / 2分48秒

2021年12月1日、小林は渡航制限によってベルリンから日本に帰ることができなくなった。その時初めて、自身が「在外邦人」として括られることを知った。言葉にできない不安を感じたのと同時に、どこかにいるはずの在外邦人への結束感を感じた小林は、全ての在外邦人(1,344,900人)に向けた詩を作り、自作のマスク型装置で朗読した。「叫んであげるよ 私たちの本当の言葉で 私たちの本音を ありったけ」。自分自身が何かにカテゴライズされた時、あなたはどんな感覚を覚えるだろうか。

2
Podcast シリーズ《Süß》
2024
Podcast



カジュアルなおしゃべりを題材とした Podcast。複数の人々のおしゃべりを収録。タイトルの《Süß》は、ドイツ語で「甘い」を意味する。おやつを食べながら、ラジオを聴くような感覚で楽しんでほしい。会期中におしゃべりは増えていく予定。《Süß》の試聴ゾーンでは、カフェのドリンクを持ち込むことができる。

6
《つぎはぎの言語》main video
2023
シングルチャンネルビデオ、多言語詩 / 8分19秒

エクソフォニー（「母語の外にある状態一般」の意）を主題とした作品。中国 四川省出身の詩人・廖亦武氏へのインタビュー、そしてその翻訳過程から、多言語詩を詩作。制作過程で、中国語、日本語、英語といういくつもの言語が交錯し、自動翻訳やディスカッションによる再翻訳によって、異なる意味や解釈が生まれる。翻訳することができない言葉や、複数の喋りの中で生まれる言葉の齟齬を肯定的に捉えようとする。

異性愛規範のもと生活する家族の
レスポンス、痛みを抱くクリアの会話と
対比することで、ささやかな「パーソナルな」
クリア映画を制作した。

8
Appertus
2024
自転車型装置、映像インスタレーション / サイズ可変

ベルリンで暮らすアジア系移民の、移動するアイデンティティを主題とした作品。ヘッドライトの役割を果たすマスク型の装置が備え付けられた自転車に小林が乗り、夜の街を走り抜ける。発話と連動して点灯し、唇の像が地面へ投影されてゆく。しゃべり続けながら必死に運転する中で、ちりぢりになる言葉。運転中にこぼれ落ちた言葉を元にした詩が左右の壁に映し出される。

3
dailylog
2020-22
シングルチャンネルビデオ / 19分33秒

小林がベルリンに移住してすぐ、パンデミックによって出入国が規制された。ベルリンで行動が制限されたことによる、どうしようもない不安感や行き場のない思いが、ドイツでは通じない母国語で吐露される。ワクチン接種の空気感の違いや、ベルリンの日照時間が少なく気が滅入っている話など、小林自身の生活の中で起きた出来事をさまざまな場所で話している様子を残したおしゃべりの記録でもある。

6-a
《つぎはぎの言語》interview
2023
シングルチャンネル・ビデオ / 52分45秒

中国四川省出身の詩人・廖亦武氏へのインタビュー。インタビューは全編中国語で行われた。
廖氏の
亡命の経験が、彼の著書
『武漢病毒襲来日記』にみられる
フクシマと東電の事故の
対比が 再びみられる。

6-b
《つぎはぎの言語》中国語自動書き起こし
2023
シングルチャンネル・ビデオ / 60分34秒

廖亦武氏のインタビュー音声を、映像編集ソフトを使い、中国語に文字起こしした。

4 写真・映像撮影 NG
Exophonifesto #1
2023
シングルチャンネルビデオ / 4分15秒

ヴァージニア・ウルフの『自分ひとりの部屋 (A Room of One's Own)』を十和田の路上、品川駅のコンコース、国会議事堂の前、実家の居間で朗読する様子。男性の身体を持つ小林が、異性の抱える問題の当事者にはなれないことを、時折、噛み締めるような姿が印象的に映る。

6-c
《つぎはぎの言語》中国語→英語自動翻訳
2023
シングルチャンネル・ビデオ / 11分21秒

自動翻訳ソフトを使い、中国語を英語に翻訳。

6-d
《つぎはぎの言語》文章から詩を取り出す作業
2023
シングルチャンネルビデオ / 15分12秒

書き起こした言葉を用いて、小林が詩作する様子

6-e
《つぎはぎの言語》discussion
2023
シングルチャンネルビデオ / 55分43秒

自動翻訳ソフトを使い、中国語を英語に翻訳したのち、中国雲南省出身の友人・張青雲と、より適した翻訳にするための議論を重ねる様子。この原稿をもとに詩作を行なった。

アジア系移民の痛みを伝える
翻訳を目標とした。